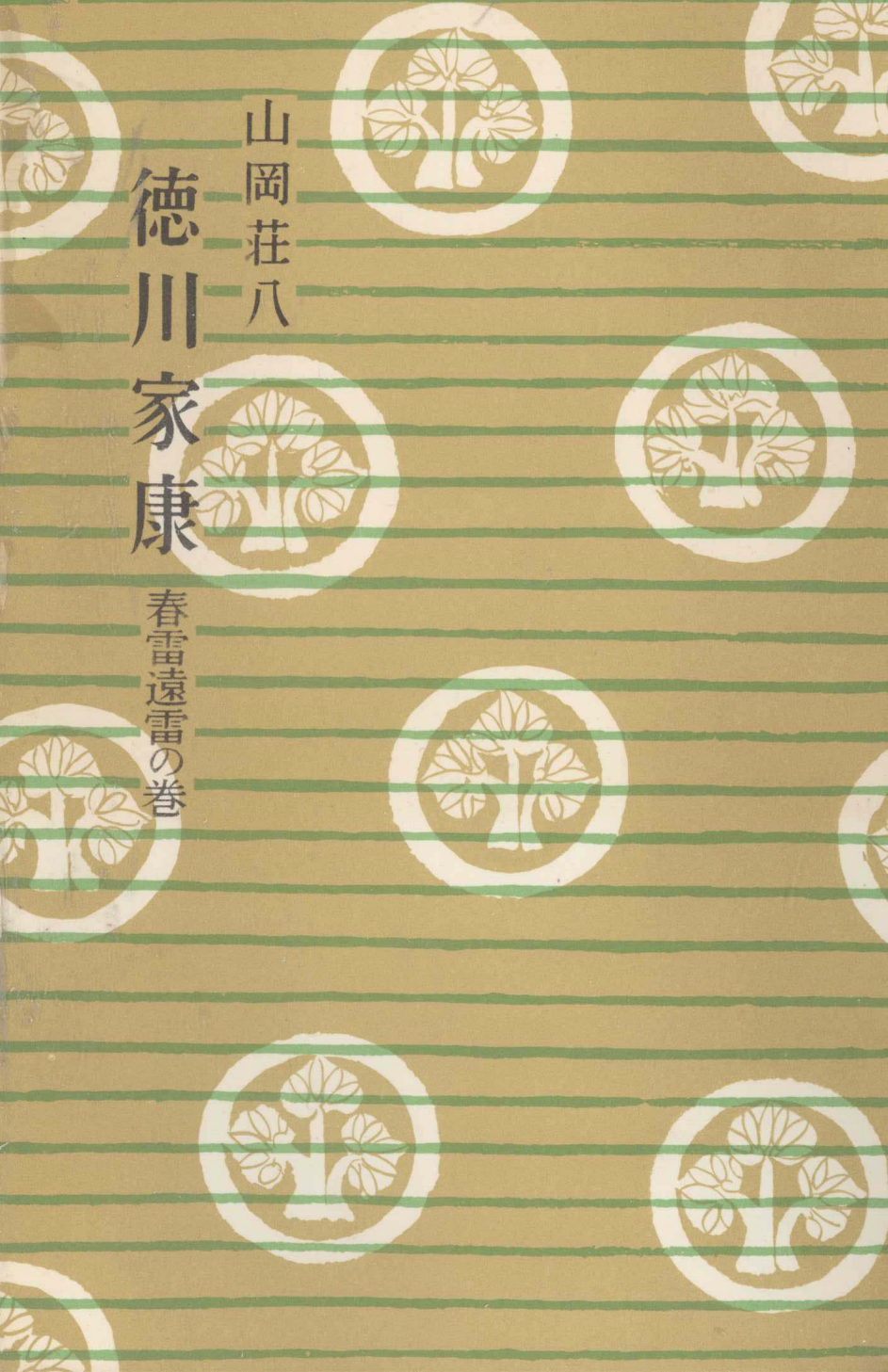


山岡莊八

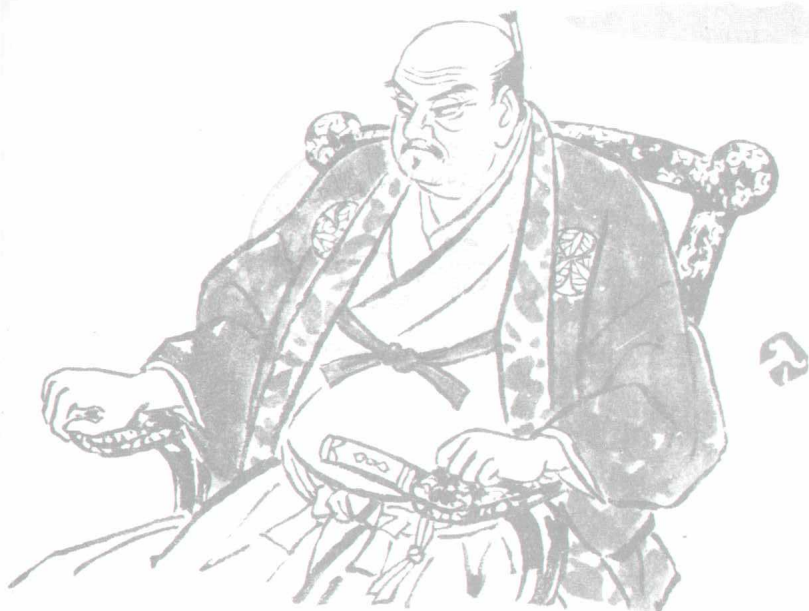
徳川家康

春雷遠雷の巻



春雷遠雷の巻

山岡莊八



講談社

徳川家康(2)

春雷遠雷の巻



昭和39年11月15日 第1刷発行 ¥320

昭和40年3月30日 第2刷発行

著 者 やま おか そう はち
山 岡 荘 八

東京都文京区音羽町3-19

発 行 者 野 間 省 一

東京都文京区大塚坂下町114

印 刷 所 豊 国 印 刷 株 式 会 社

発行所 東京都文京区音羽町3-19 株式
電話東京(942)1111大代表 会社 講 談 社
振 替 東 京 3 9 3 0

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。 (大進堂製本)

© 1964 Sōhachi Yamaoka

目 次

南 蚕 ほ た る	紅 毛 草	無 憂 地 獄	未 通 の 妻	蜘蛛の才覚	巨樹の思案	生 き る 証	恐 怖 の 記 憶	四 条 の 水
一九	一七	一七	二六	七	七	五	六	七

家康外交……………二二三

鈴の鳴る森……………二三四

緑の小箱……………二四九

女の秋……………二七〇

三百年の窓……………二九〇

人生仕上げ……………三〇六

濃い血薄い血……………三三四

冬枯れの艶……………三五〇

装 幀
杉 本 健 吉
扉 絵
木 下 二 介

徳川家康

春雷遠雷の巻

四 条 の 水

一

京の繁昌は、慶長八年このかた、かつてない庶民の安堵に裏づけられて続いて来た。

それが去年の豊国祭で一段と根づいた感じになり、今年、十年の夏になると、もはや戦国は遠い昔のような賑わいを呈して来た。

途中でちよつと水を差された形になつた秀忠の上洛が、実は却つて庶民の不安を根こそぎとり除いた結果になつた。

秀忠が十六万の軍勢を引きつれて上洛し、二代將軍になるのだと聞かされたときには、大坂だけではなく、この洛中でも避難先の用意にかかる者が出たほどだったが、しかしそれは、所司代板倉勝重をはじめ、茶屋四郎次郎清次、本阿弥光悦、

角倉与市などの熱心な説得でそれほどの騒ぎにならずに済んだし、それが無事に済んだころには、盛大な高台寺の落成式が行なわれた。

心ある者は、秀頼の上洛が、上方大名と淀の方の反対で中止されたと聞かされた時には少なからず眉をひそめたものであつた。が、家康はそれに対して何のこだわりも示さなかつただけではなく、却つて、六男の忠輝を秀忠の代理として大坂城へ遣わし、ことなく行事を済ませて、江戸へ引きあげたと知つた時は、

「——これでもはや天下は決まつたぞ」

と、腹の底から安堵した。

秀忠が京を發つたのは六月四日。

本阿弥光悦も実のところ、その日は赤飯を焚いて一族中で祝つたものだ。

「——大御所がある限り、日本の国はビクともするものではない」

太閤ではまだ一抹の不安を拭いきれなかつた光

悦も、その日は親類縁者一同をあつめて、

「——新しい京の誕生日と思うがいい」

上機嫌で、盃を重ねたものであつた。

實際秀忠が引きあげ、それから二十四日目、高台院が正式に高台寺へ住居を移してゆくと、洛中洛外の人氣ががらりと、一変してしまつた。

人心がほんとうに安定した証拠に、近ごろは北野天満宮の境内や四条河原には見世物小屋が建ちならび、炎天下ながら人出はおどろくほどの量になつてゐる。

むろん京の町人だけではなく、諸国からの参詣客、泰平をたたえての見物客が安心して集まつて来るからだつた。

そうした一日、本阿弥光悦は年少の友角倉与市と、四条河原の女歌舞伎の小屋の前でパッタリ会つた。

与市は、これも若い茶屋と肩を並べる名うての新しい事業家で、内心では、

「——今に見ろ」と、秘かに交易拡張の秘策を練つてゐるらしい。

その与市が、もう一艘御朱印船をふやしたいと、その許可方を命じられてゐる豊光寺承兌に取りなしを頼んで来ていたのだ。

「これはよいところでお目にかかりました。一寸そのあたりでお茶一つ……」

与市は、そう云うと、否応云わせず流れの近くの葭簀張りの茶店に光悦を誘い込んだ。

「あなた様は茶屋どのが大の最負、さりながら、この与市も見捨てられては困ります。私はもう一艘、何としても東京行きトシヤンの御朱印が欲しいのでござりまする」

「わかつて居る居る。そのことは、わしがもう大御所さまに取り次いであることじや」

涼しい川風の縁台に腰をおろして、光悦は、ハッとした。

先客の顔に見覚えがあつたのだ……

二

「はてな、誰であつたらう……？」

角倉与市の話をほどよく耳で聞きわけながら、光悦は、葎簀をすかして見える隣りの客の顔を思ひ出そうとあせていた。

宗匠頭巾をかむつて上品な五十がらみの客の相手は、立派な身なりの武士であつた。

「ようわかつた。安心なさるがよい。きつとご許可になることじや」

もう一度与市に答えておいて、光悦は、思わずポンと膝を叩いた。

「そうじや！ 高山右近太夫じや」

「は、何といわれました」

面喰つて訊きかえず角倉与市を、

「シーッ」と、眼顔で制しておいて、流れの上に張り出した縁台の、境の葎簀にピタリと背をつけて座つていった。

そうなると与市も領いてそれにならない、

「どなたでござりまする。お隣りは」

小声で光悦をのぞきこんだ。

「それ、日本国を切支丹教国にしようとして、到頭太閤さまのご不興を蒙つた、高山右近太夫じや」

「ほう、すると、あの加賀の前田家に身を寄せられておわす茶道の……」

「そうじや。はじめは南坊、いまはたしか等伯どのといわれている筈。茶では利休居士七哲の一人にあげられ、極上一の弟子也などと褒められていたお方じや」

「ほう、すると、久しぶりに、加賀からの遊山旅でござりまするな」

「シーッ」と、又光悦はさえぎつた。

というのは、高山右近と一緒の侍が、松平忠輝といったような気がしたからだつた。

忠輝は、この間將軍秀忠の代理として、大坂城

に使いしてから急に京の話題になつた人物……いや、光悦が特にその名に関心を持ついわれは別にあつた。

他でもない、自分の従妹がこうが、その忠輝の執政を勤めている大久保長安の妾になり、しかも最近佐渡から出て来て、京にいるという噂があるからであつた。

「ほう、するとその忠輝どの、仲々のご器量人と申されるか」

耳を澄ますと、高山右近の声は流れの音を越えてハッキリと光悦の耳にひびいた。

謡曲堪能の、鍛えた声のせいらしい。

「いかにも。私も秀頼さまお側にあつて、その口上を承りましたが、家康どのご子息の中では、結城秀康さまに勝るとも劣らぬ氣凛のお方と見受けました」

「なるほどの」

「このお方の眉にも眼にも、ありありと叛骨が見

てとれる。面白いとは思われませぬか」

連れの侍はそういつて低く笑つた。高山右近も充分それに興味を感じているらしく、

「大ぜいの兄弟の中には、思わぬ叛逆児も出て来るもの、したが、ただそれだけではどうにもなるまい」

「むろん、それだけではどうにもなりませぬ。だが、旧教国側の敵であるイギリス人の三浦安針を、家康の傍にそのままおくは危険千万。何時われわれ教派の者は彼に計られて日本退出を命ぜられるかわかりますまい。バテレン衆の不安は一方ならぬものがござる」

「フーン、すると、その忠輝どのを使うて、一本くさびを打ち込もうといわれるのじやな」

と、その時だつた。

「あ、隣りの侍は、明石掃部どのでございますよ」

角倉与市が顔を寄せて光悦にささやいた。

三

光悦は、何かしらドキンと胸にこたえるものがあつた。明石掃部が、日本を切支丹教国にしようとして領民にまでそれを押しつけ、ついに太閤を怒らせてしまつた高山右近と四条の川風になぶられながら出遭つてゐる。

これは決して偶然とは考えられない。明石掃部もまた熱心な切支丹信者で、淀の方も秀頼もごつそり信者にしようとして機会を狙つてゐる人物なのだ。

(これは掃部が右近太夫をわざわざ加賀から呼び出したのかも知れない……)

そう思うと、二人の会話には聞き捨てならない意味が想像されてくる。

「そうか。忠輝という人がのう」

すぐうしろで本阿弥光悦が、全身を耳にして聞き入つてゐるとも知らず、高山右近はまた咳い

た。

「あのお方は確かいま、信濃の国へご領地を持つておいであつたな」

「はい。今は川中島……しかし大半は江戸の邸にあつてご領内にはござりませぬ」

「という、何ぞそのお方に近よる手だてでもあるといわれるのか」

「むろん有る……と、はつきりは申せませぬ。手蔓は求めて作るべきもの……と考えれば無いこともない……というところで」

「フーム。するとその方の最も懇ろにして居られる大名は？」

「舅御が、伊達政宗にござりまする」

「なに、伊達どのがご息女が……」

「そして、最初この縁談の口利きをなされましたのは、等伯さまご懇意の堺の宗薫にござりまする」

もう一度高山右近は、低くうなつた。

「それで、江戸に博愛病院を作りましたソテロは、ようやくその伊達どのと連絡をつけましたようで……」

「なるほど」

「幸いなことは、その伊達どのが息女、つまり忠輝さまの奥方となるべき女性が、われ等と同じ旧教の信者……つまり同志にござりまする」

本阿弥光悦は、咽喉がカラカラに乾いて来た。

あわてて茶を口へ運びながら、

「これは思いのほかに風がある。涼をとつているうちにとろりと眠くなつてくるわ」

眼頭で角倉与市に合図しながら、いよいよ緊張していった。

今までの隣りの会話を要約してゆくと、これはまことに容易ならぬ意味を持つて来そうだ。

忠輝の奥方が旧教の信者ゆえ、それを足場にして忠輝に働きかけ、同時にその舅の伊達政宗を抱きこんで、旧教……即ちポルトガルのエスイタ

派、イスパニヤのフランシスカン派、ドミニカ派などの安泰を計ろうと考えているらしい。

云うまでもなく彼等をそうした策動に誘い込んだ直接の原因は、家康の世界知識の顧問ともいふべき三浦安針がイギリス人だということにあるらしい。

イギリスとオランダは、近ごろぐんぐん国力を伸ばして来た欧羅巴の新興勢力で、いま至るところでポルトガル、イスパニヤ等の旧勢力と相争っている。

両者の船が洋上で出あうと必ず海戦になるので、双方とも軍艦を付けて航行しているという話であつた。

そこへ今日の思いがけない高山右近と、明石掃部の密会なのだから光悦がドキリとするのも無理はなかつた。

四

「ソテロが博愛病院を江戸に建てましてな」

と、掃部は云った。

「その看護婦の一人を政宗に献じましたそうで」

「あまり感心したことではないの」

根が潔癖すぎるほどに潔癖な右近は、その話には苦々しそうに舌打ちした。

しかし、明石掃部は、わざとそれを無視して、彼の云う策戦の方に重みをかけているらしい。

「ここではある程度のご不快は眼をつむつて頂くとして、その看護婦が時々伊達家の邸内で病気になるのでございます」

「フーム」

「すると、夜中でも博愛病院の医師ブルギリヨにお召しかかる。すると、ブルギリヨに付き添つてソテロも伊達家の門をくぐり、政宗公に面接出来る……そこまでは手筈がついたと申しまする」

高山右近は黙っている。異教徒ながら、日蓮信者でこれも潔癖な光悦には、右近の黙っているの

がよくわかる気がした。

如何に旧教の死活にかかわる大事な場合とはいえ、貧民救済のために建てた博愛病院の看護婦を献じたり、それを偽せ病人に仕立てたりして、連絡をとるといふのは、宗教家にあるまじき汚辱の策謀というべきだ。

「したがつて、ここにもう一つ別に連絡路がつけられまいかというのがソテロの願いでございませう」

「もう一つ……と云われると？」

「松平忠輝、その人と直接ソテロが会う機会……それを作り得る人物をご存知あるまいかと」

「それならば、伊達どのご自身か、さもなくば忠輝どのの家老、大久保長安がよいであろうが」

「いいやそれがもう双方から断われましたので」

「なに、双方から断われた……？」

「はい。大久保長安は、自身でソテロに会い、わ

か君はまだお若いゆえその儀はならぬ……そして伊達どのは、婿にまで信教を押しつける形になるゆえお断わりと……」

「フーム。何れもソテロを、曲者と見破つたのであろうて」

「と、いつて手をつかねて居るうちに、安針に、イギリスの船など呼ばれてしもうては後の祭りになりまする」

「明石どの、ちよつと待たれよ。わしにはそのソテロの肚がよう読めぬ。ソテロは忠輝に直接会うて何をしようというのじゃ」

「むろん、海賊国イギリスの本性を、よく吹きこむつもりでござりましょう」

「と申しても、忠輝どのはたかが信濃の一大名、何の権力もないお方であらうが」

すると、掃部は、光悦が思わず立つてウロウロするほど恐ろしいことを云つてのけた。

「等伯さま、忠輝は新將軍をしのぐ叛骨のお方と

私は申し上げました」

「それは聞いたが……」

「さすればこのお方を大坂と握手させ、万一のおりには、イスパニヤから軍艦を呼び寄せましても、折角これまでひろまつたこの国中の教権は守りぬかねばなりません」

「というと、忠輝どのに謀叛を……」

「シ——ッ。その用意……その用意、があれば心強い。大御所はすでに老境にござりまする」

高山右近も、びつくりしたと見えて、又しばらく答えはない……

五

本阿弥光悦は、あわてて立つて角倉与市の袖をひいた。

話がこれほど恐ろしいことに及ぶとは思つていなかった。当の高山右近も今までは、こんな話になろうとは考えていなかったゆえ油断していたの